『7つの都市の物語——文化は都市をむすぶ』

荒このみ編著

NTT出版、二〇〇三年三月刊

都市には人文現象が集中し、その集中する過程も、現象の堆積結果もさまざまなかたちで記録されている。記録といっても言語によらないことが多いので、その読解にはそれなりの勉強が要る。現象の生起や堆積が波動的であれば、つまり時間によって濃度が違えば、見やすい、鮮やかな地層をなすこともあるが、そうでないこともある。ここでは東京（松山巌）、ハノイ（川口健一）、プラハ（篠原琢）、ローマ（河島英昭）、ロンドン（小池滋）、ブエノス・アイレス（増田義郎）、ニューヨーク（荒このみ）という七つの都市が選ばれ、それぞれにうってつけの人物が、とりわけ二〇世紀の両大戦間期に注目して、地層の観察を行っている。

両大戦間期の都市というと、たとえばG・オーウェルやH・ミラー「が」記録したパリ、エコール・ド・パリの画家たちの生「を」記録するパリといったようなことがすぐ頭に浮かんで、どれもこれも一冊の本が必要な情報量だと思ってしまうが、ここではそういう掘り下げ方ではなく、大戦や世界恐慌、植民地主義の清算、大量移住、亡命といったできごとを共有する時代で各地を輪切りにしてみようというのが狙いだったらしい。

活字が大きめで、行間や余白も広めのゆったりとした組み方で実に読みやすい本だが、その分文章の密度が濃いので、読み応えに不足感はまったくない。

松山巌氏が担当する東京では、他の六都市にはなかった関東大震災という自然現象の比重が当然大きい。しかし、震災があってもなくても鳴りつづけていたはずの「近代化」という通奏低音が、いかに強力なエネルギーをもっていたか、それがはからずも震災によって露呈するありさまが、道路、葬儀、墓地、犯罪の変容を通じて描かれる。説教強盗と「文化住宅」増加の関連も面白く、阿部定が「逃げるというよりも繁華街ばかりをうろついている」という指摘にも大変刺激を受けた。

ハノイの両大戦間期は、西欧化、近代化、民族文化創出というヴェトナム人のヴェクトルがいわば三つ巴のかたちでからまりあう中、ヴェトナムの文学、文化、建築、市民生活が変貌していった時代である。ファム・クインという人物がハノイのフランス極東学院での仕事を辞めてまで打ち込むことになる雑誌『南風』（一九一七年創刊）、あるいはヴェトナム近代文学の出発点とされる小説『トー・タム』など、いずれも興味深い事例が、みごとな訳文をまじえながら、川口健一氏によって語られる。

かつてのボヘミア王国の王都、神聖ローマ帝国の帝都プラハが、一九一八年にチェコスロヴァキア共和国首都となったとき、人々が、あるいはマサリクのような思想家、政治家がどのようにこの町を「整形」し

てゆこうとしたか――時折自分も通りかかる町のことだけに、篠原琢氏のエッセイを大きな関心をもって読んだ。この時代さまざまな方角からおびただしい亡命者たちがやってきたプラハだったが、そのあり方を、「それはこの町の多文化性、あるいは寛容さの故ではなくて、もしかすると、この文化的な亀裂に亡命者たちが潜り込むことができたためかもしれない」とする、歴史学者篠原氏の控えめな感想が示唆的である。

本書で取り上げられた都市の中ではいちばん地層に厚みがあると思われるローマについては、河島英昭氏が執筆しているが、かつてみずから城壁内《ヴェッキア・ローマ》に住んで、歩き回った河島氏ほど、ファシストによるローマの改造を物語るに適した人がいるだろうか。「近年、世に溢れる案内書や概説書の中には、ファシズムが都市ローマの街角に残した爪痕に敏感でない場合が多く、甚だしくはその傷痕を〈ファシズムも良いことをした〉といってしまう場合さえ少なくない」という筆者の言葉にはすぐさま同感しながらも、ではことローマに関して自分に明確な分析眼があるかといえば、即座にないと言える。

「貴君は解放の作業を続けるのだ。この樫の大木から、幹にまつわりつくものを、すべて取り除くために、アウグストゥス帝の霊廟、古代マルチェッロ劇場跡、カンピドッリオの丘、そして万神殿の周囲を広げるのだ。この退廃の数世紀のうちにまつわりついたもの、すべては、消え失せねばならない。五年以内に、記念石柱のあるコロンナ広場から、太い道が走って、行く手に巨大な万神殿の姿が現れねばならない」（本書一三四頁）という一九二五年大晦日のカンピドッリオの丘から呼ばわるムッソリーニの言葉を知っているといないとでは大違いで、一般のガイドブックで歩くことの限界をこれほど思い知らされる文章もない。

小池滋氏は、クリスティー、クロフツ、バークリー（アイルズ）らの小説を具体的に紹介しながら、「第一次世界大戦と、その終了直後の一九二〇年にはじまったイギリス・ミステリー小説黄金時代との間には、はっきりとした因果関係がある」という結論、「ミステリー小説は本質的に〈都市小説〉だ」という主張の証明に向かって推理を展開する。後の方の主張は、私にもすんなり受け入れられるというより、自分でもそう思っていたということが確認されただけのようだが、大戦が英国人に及ぼした影響について書かれたくだりはどれも新鮮で、なるほどなるほどという読後感が残った。

私はブエノス・アイレスには行ったことがない。しかしゴンブローヴィチというポーランド語の作家がいて、一九三九年の夏たまたまアルゼンチンへ遊びにいっていたところ第二次世界大戦が始まってしまったために、ブエノス・アイレスに残ることにし、かれこれ二四年間この町で生き、そこで文章を書き、さまざまな文学者ともつきあっていたということがあるので、まったく関心がないわけではなかった。

増田義郎氏も、ブエノス・アイレスは移住者によって形成された町であり、内部にさまざまなたがいに異なる文化的伝統を内包していることをまず述べ、その「コスモポリタンな文化的環境」の中でガルデルのタンゴやボルヘスの小説が生まれたとしている。「アルゼンチンの地域主義を超越した世界的作家」ボルヘスが、「ブエノス・アイレスの街々は、

もうわたしの臓の腑だ」の句で始める『ブエノス・アイレスの情熱』という詩集を出しているという意外な事実を私は知ったし、「そういえば、宇宙論的な彼の小説、たとえば、幾何学的に構成された大都会の殺人を扱い、神の前の人間存在の寓意を秘めたといわれる短篇〈詩とコンパス〉も、結局はブエノス・アイレスを舞台とした小説と受け取ることもできるのではないだろうか」という増田氏の言葉が印象に残った。

本書のもとともなった、東外大総合文化研究所の連続公開講演会をコーディネイトし、この本をとりまとめ、「まえがき　パラダイムシフトを予感する」「あとがき」をも書いた荒このみ氏は、ニューヨークの章に「ハーレム文化とプリミティヴィズム／エグゾティシズム」という副題を付け、他の章ではほとんど言及されていない音楽、美術、演劇、エンターテインメントにも目を向け、まさにこれらの領域で二〇年代から三〇年代にかけてニューヨークのハーレムで起こった文化革命「ハーレム・ルネッサンス」を広い視野で描いている。ラングストン・ヒューズの二篇の詩をはじめ、豊富に引用されたどのテクストも、荒氏の生彩ある翻訳が素晴らしい。

（関口時正）